

幾年もたった後

小川未明

青空文庫

ある輝^{かがや}かしい日^ひのことです。父親^{ちちおや}は、子供^{こども}の手^てを引きながら道^{みち}を歩いていました。

まだ昨日^{きのう}降^ふった雨^{あめ}の水^{みず}が、ところどころ地^ちのくぼみにたまっていました。その水^{みず}の面^{おもて}にも、日^ひの光^{ひかり}は美しく照^てらして輝^{かがや}いていました。

子供^{こども}は、その水^{みず}たまりをのぞき込^こむように、その前^{まえ}にくると歩^{あゆ}みを止^とめてたたずみました。

「坊^{ぼう}や、そこは水^{みず}たまりだよ。入^{はい}ると足^{あし}が汚^{よご}れるから、こつちを歩^{ある}くのだよ。」と、父^{ちちお}親^やはいいました。

子供^{こども}は、そんなことは耳^{みみ}にはいらないうちに、笑^{わら}って足^{あし}先^{さき}で、水^{みず}の面^{おもて}を踏^ふもうとしていました。

「足^{あし}が汚^{よご}れるよ。」と、父^{ちちおや}親^やは無^む理^りに、やわらかな白^{しろ}い子供^{こども}の腕^{うで}を引^ひつ張^ばりました。すると、子供^{こども}は、やつと父^{ちちおや}親^やのあとについてきました。また、二足^{ふたあし}三足^{みあし}歩^{ある}くと、また立ち止^どまって、こんどは頭^{あたま}の上^{うへ}に垂^たれ下^さがった木^きの枝^{えだ}をながめて笑^{わら}っていました。

その木^きは、なんの木^きか知らなかったけれど、緑^{みどりいろ}色^{いろ}の葉^はがしげっていました。そして、その緑^{みどりいろ}色^{いろ}の葉^はの一つ一つは、青^{あお}玉^{だま}のように美^{うつく}しく日^ひに輝^{かがや}いていました。

父親ちちおやは子供こどもがうれしそうに、木の葉きはの動くうごのをながめて笑わらっているようすを見るみにつけ、また水みづたまりをおもしろそうにのぞき込んだようすを思い出おもすにつけ、この世よの中なかが、どんなに子供こどもの目めには美しく見えるみのだろうかと考えかんがずにはいられませんでした。

父親ちちおやは、子供こどもの手てを引ひいて、ゆるゆると道みちの上うへを歩あるいていきました。そして、父親ちちおやは、自分じぶんも、こんなように子供こどもの時分じぶんがあつたのだということを、ふと心こころの中うちに思い出おもしたのであります。

「やはり自分じぶんもこんなように、歩あるいたのであろう。やはり自分じぶんの目めにも、こんなように、映うつつたものはなんでも美しく見えみたことがあつたのであろう。」と、父親ちちおやは思おもつたのであります。

しかし、もう、いまとなつては、そんな昔むかしのことをすっかり忘れてしましました。これは、ひとり、この父親ちちおやばかりにかぎつたことではないであります。みんな人間にんげんというものは一度ど経験けいけんしたことも年としをたつにつれて、だんだんと忘わすれてしまうものです。そして、もう一度いちどそれを知しりたいと思おもつても思おもい出だすことができないのであります。

「ああ、どんな気持きもちちだろうか？ もう一度自分じぶんもあんな子供こどもの時分じぶんになつてみたい。」と、父親ちちおやはしみじみと思おもいました。

この父親は、やさしい、いい人でありました。無邪気な、世の中のいろいろなことには、なにも知らない、ただ、なにかもが美しく、そして、みんな笑っているようにしか見えない子供の心持ちを、ほんとうに哀れに感じていました。それでありますから、できるだけ、子供にやさしく、そして、しんせつにしてやろうと思いました。

子供は、二足、三足歩くと足もとの小石を拾って、それを珍しそうに、ながめていました。鶏が餌を探しているのと立ち止まって、

「とつと、とつと。」といって、ぼんやりとながめていました。

また小犬が遊んでいると、子供は立ち止まって、じつとそれをば見守りました。

「わんわんや、わんわんや。」と、かわいらしい、ほんとうに心からやさしい声を出して、小さな手を出して招くのでした。

子供にとつて、木の葉も、草も、小石も、鶏も、小犬もみんな友だちであつたのです。

その父親は、手間がとれても、子供の気の向くままにまかせて、ぼんやり立ち止まって、それを見守っていることもありました。

「なぜ、人間は、いつまでもこの子供の心を失わずにいられないものだろうか。なぜ年を取るにつれて、悪い考えをもったり、まちがった考えをいだいたりするようになるもの

だろうか。ああ、自分も、どうかして、もう一度、なにも世の中のことを知らなかった、そして、なんでも美しく見える子供の時分になりたいものだ。しかし、流れた水が、もう帰ってこないように、なれるものでない。」と、父親は、考えながら歩いていきました。

すると、ふいに、耳もとで、

「もう一度、おまえは子供になれるから、心配をするな。」といったものがありました。

父親は、はつと驚きました。だれが、それをいったのだらうと、くるくると頭をあたりにまわしてみましたが、あたりには、だれも歩いていないものはなかったのです。また、だれも自分の胸の中で思っていることを知り得るはずはなかったものでありました。

不思議なことがあるものだと思つて、空を仰ぎますと、太陽が円い顔をして、にこにこ笑つていました。

いま、そういつたのは、太陽かと思いましたが、

「ほんとうに、私はもう一度、子供に帰れるでしょうか？ 私は世の中の苦勞をしました。

私の頭からは、無邪氣ということがなくなつてしまいました。私はどう考えましても、木の葉や小石や、犬ころを友だちとする気にはなれません。どうして、この私が、二度と子供になれるでありませんか。」と、父親はいいました。

「もう一度、おまえを子供にしてやる。」と、太陽はいいました。

父親は、それが自分の空想でないかしらん。いくら太陽だって、そんなことをい
い得るものでなからう！。それとも、自分が死んで、こんどふたたびこの世界に生まれ
わつてきたときをいうのではなからうかと思ひましたから、父親は太陽に向かつて、
「ほんとうのことですごいますか。この世で死ぬまでに、もう一度、子供になれるで
まいしょうか。」とたずねました。

「そうだ、死ぬまでに、もう一度、子供にしてやる。」と、太陽はいいました。

「ああ、うれしい！」と、父親は、自分の子供を抱き上げていいました。

「子供であることをうれしいとは、子供は思っていない。子供はまじめなんだ。子供のい
うことをよく聞いてやれ！。そして、子供を大事にしなければならぬ。」と、太陽は
いいました。このときは、太陽も、まじめになって、いつものようにあいきようよく笑
つているように見えませんでした。

そのとき、父親は、まだ年が若かったのであります。太陽がいつかいったことを後
には忘れてしまいました。いったことの意味は、思い出されても、なんで太陽がものを
いうものか。あれは、みんな自分の描いた空想に過ぎなかつたと思つたであります。

そして、あのときの子供は、大きくなりました。子供があの子の父親の年ごろになつたときは、もう子供には、子供が産まれて、父親は、年をとってしまいました。

父親に孫ができたわけであります。父親は、だんだん年をとって、ついにおじいさんになつてしまいました。

このおじいさんは、いいおじいさんで、やさしく孫たちをかわいがりました。だから、孫たちは、おじいさん、おじいさんといつて懐きました。しかしおじいさんは、もう孫たちのめんどろを見ることができなくなったほど年をとってしまいました。

すると、おじいさんは、いつとはなしに、この世の中での、うるさかったこと、めんどろだったこと、心をなやましたこと、また苦しかったこと、いろいろなことが忘れられてゆきました。

おじいさんの目は、子供の目のように美しく澄んできました。すると、なんでも、目に映つたものは美しく見えました。おじいさんは、道ばたに咲いている山茶花も、菊の花も、みんな心あつてなにか物語ろうとしているように見られたのです。おじいさんは、つえを止めて、腰を伸ばして、ぼんやりとそれに見とれていました。

小鳥が、木のこずえにきて鳴いていると、おじいさんは、また立ち止まって、その鳴き

声こゑに聞きとれていました。

ある日ひのこと、おじいさんは、孫まごたちに手てを引ひかれて歩あるいていました。

「おじいさん、ここは水みづたまりですよ。この板いたの上うえをトン、トンとお歩あるきなさいよ。」と、孫まごたちに教おそわつて、おじいさんは、その水みづたまりを歩あるいていました。

おじいさんには、なにかもこの世界せかいが美しく、そして、広ひろく見みられたのであります。

太陽たいようは、大空おおぞらから、下したを見みていました。そして、この有あり様さまを笑えが顔おでながめていました。

昔むかし、あのおじいさんは、自分じぶんの子供こどもを、ちようどあのように手てを引ひいて、この道みちを歩あるいたことがあつた。いまは、孫まごたちに手てを引ひかれて、ああして歩あるいてゆく。

「どうか、もう一度子供こどもの時分じぶんになつてみたい。」と、あの時分じぶんいつていた。そして、そのとき、俺おれが、「もう一度、おまえを子供こどもにしてやる。」といったら、たいへんに喜よろこんだものだ。いまあのように子供こどもと同じである。

こう、太陽たいようは考かんがえると、下したを歩あるいているおじいさんに向むかつて、「三十年ねんも、四十年ねんも昔むかしに、もう一度子供こどもになつてみたいといったが、いまおまえは、どんなに、考かんがえている？」と、太陽たいようはたずねました。

しかし、おじいさんは、知らぬ顔^{かお}で、とぼとぼと歩^{ある}いていました。おじいさんには太^{たいよ}陽^うのいったことが、ちょうど子供^{こども}のようにわからなかったのです。

——一九二二・七作——

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「幾年《いくねん》もたった後《のち》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：本読み小僧

2012年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幾年もたった後

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>